



# 5月号表紙の顔 坂本かや

KAYA SAKAMOTO



さかもと・かや／2000年1月17日、神奈川県相模原市生まれ。156cm、右投げ。血液型A。16年プロ入り（49期／ライセンスNo544）。永山コバボウル所属。優勝1回（18年女子新人戦）。昨年度アベレージ212.93。

口になると決めていた」という。

その決意どおり、16年度の

の大接戦を、わずか1ピン差のトップで勝ち抜け、渋谷ヒカリエホールの特設レーンで行われた決勝大会に進出した。しかし3位から勝ち上がってきた中野麻理子プロ（45期）の「あわやパーフェクト」の快投の前に、惜しくも準Vに終わった。

「決勝大会は、普段とはまるで雰囲気の違いキラキラした会場でワクワクしたし、楽しかったです（笑）。負けてしまいましたが、自分なりにできる限りの対処をした結果で、悔いはありません。でも、今年は10代最後の1年。年内にレギュラーツアーのタイトルを獲得のが目標です」

## 10代のうちにレギュラータイトルを！

本紙リニューアル第2号にして令和元年初の表紙にご登場願ったのは、プロ4年目の坂本かやプロ。女子には数少ないローダウン投法から高速回転のボールで、スプラッシュの快音を響かせる、弱冠19歳の逸材だ。

「はじめてのボウリング」は小4のとき。両親と弟の家族4人で地元（相模原市）のセンターへ投げに行き、ビギナーズラックで？いきなり8本スペアをマーク。「それがうれしくて、すぐにハマってしまった」という。

以来、家族でセンターの会員となって頻りにボウリングを楽

しむようになり、またたく間に腕前も上達。実をいうと彼女、当時は「泳げない、走れない」の自他ともに認める運動オンチだったそうで「だから余計に、ボウリングで褒められるのがうれしかったんです」と笑う。

小5のとき、たまたま彼女のボウリングを目にした今泉秀規プロ（46期）に声をかけられて弟子入り。当時、千葉のセンターで開催されていた同プロのボウリング教室に月2ペースで通い、教わったことを持ち帰って週3、4回反復練習に励んだ。

当初は真っすぐにポケットを狙うオーソドックスなスタイル

のボウリングだったが「曲がるボールを投げたい」と小6の終わりごろから今泉プロの下でローダウン投法に取り組み、2年近くかけて修得した。

結果、中2のときに全日本中学選手権の県予選を突破し、「全国大会に出るために」JBCに入会。同年の成績は振るわなかったが、翌年中3で優勝を果たし、さらにその翌年、高1で全日本高校選手権を制覇。2年連続で地元の市政功労表彰を受ける栄誉にも浴した。この活躍に、JBCからはナショナルチーム選考会の推薦状が届いたが、当の本人は日の丸を背負って投げることにまったく関心がなく、「16歳になったらプ

ロテストに挑んで見事一発合格を果たした。同年度は彼女のほかに田代小夏（99年8月21日生）、男子55期の新城一也（同8月13日生）と16歳のプロが3名誕生したが、生まれ月の差で坂本プロが「史上最年少の女子高生プロ」として注目されることになった。

2年目の17年シーズンでコンスタントに好成績を挙げ、ランキング6位で早くもシードプロの仲間入り。昨季は女子新人戦を制し、同期生の中では一番乗りでタイトルホルダーにもなった。

先日のKUWATA CUPでは、「これまでの人生で一番緊張した（苦笑）」という準決勝

### 坂本プロと一緒に投げよう！ 近日開催のチャレンジマッチ

- 5月19日  
神奈川県・相模原パークレーンズ
- 6月1日  
東京都・永山コバボウル
- 6月9日  
大阪・ボウルアロー八尾店

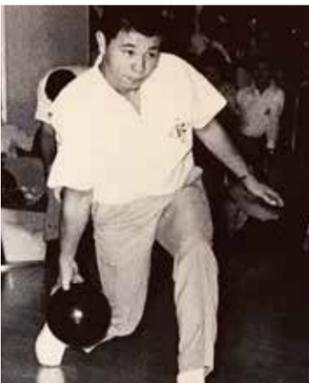
日本のボウリング史を彩る

## レジェンドたちの肖像

### File.2 矢島純一

(2017年殿堂入り)

プロボウリング黎明期から今日まで  
最前線で活躍を続ける鉄人ボウラー



▲アマチュア時代のビッグジュン

「ビッグジュン」こと男子1期生（ライセンスNo18）の矢島純一プロは、終戦前夜の1945年8月14日、東京都に生まれる。10代のころからボウリングに親しみ、アマチュア時代からオーソドックスなスタイルの腕

達者として、知る人ぞ知る存在となっていた。

全国でボウリング場建設と競技団体の誕生が相次いだ60年代半ばには、各地で開催されるボウリング教室から引っ張りだことなり、テレビのボウリング番組にも多数出演。その名は一躍全国区となり、若年層のボウリング人口拡大に貢献した。

66年1月、20歳のときに初渡米。プロアマ432選手が参加した全米オールスター大会（BPAA＝全米ボウリング場経営者協会主催）でみごと準決勝進出を果たす。

翌67年1月には日本プロボウリング協会（JPBA）のチャーターメンバー19名の一に名を連ね、翌2月に開催さ



4月2021日 / ボウルアピア郡山

## 2019オールジャパンボウリングフェスティバル

### 女子は11歳の谷口美優選手が頂点に

今大会からハンデキャップのベースが従来の200から220に変更された。もともとハンデ戦とあって、だれにも優勝のチャンスが

れた協会創立記念大会（平和島スターボウル）で優勝、JPBA第1号のタイトルホルダーとなった。

以来、国内で積み上げたタイトルは、男子プロで断トツの41を数え、公認パーフェクトも28回記録している。

2016年6月にはITRCスーパーシニアクラシックを制し、70歳にして念願のPBAA（全米プロボウラーズ協会）タイトルホルダーに。翌17年の同大会でも準優勝し、続くUSBCシニアマスターズでは米国で2度目のパーフェクトを達成した。

まさにボウリングの達者…否、鉄人だ。

ある予測困難な大会だが、その変更の影響も未知数だった。

女子は予選（9G）を2258の福村茂美選手（H/C68・東京・中野サンプラザボウル）がトップに立ち、69ピン差の2位には、11歳の谷口美優選手（H/C55・大阪・牧野松園ボウル）がつけていた。決勝は谷口選手がすべて200アップの640、ハンデをプラスして805を打って、トータル2994で優勝を飾り、福村選手は谷口選手から61ピン差の2位だった。

男子はハンデゼロの実力者・樋口慎一選手（埼玉・アイビーボウル北本）が2185の1位で決勝に進むと、決勝も709を打って、トータル2894で優勝した。予選を19位の津波政秀選手（H/C22・沖縄・マチナト）が、決勝は846と伸ばし、2854で2位に食い込んだ。



▲「引っ張る癖が出ないように気をつけた」と、あっぱれなボウリングの谷口選手



▲「好きなラインで勝負できたし、ボールチェンジもうまくいった」と樋口選手